

# 生徒理解の視点と方法

## ——巻頭言にかえて——

学校長 久世敏雄

中学生と高校生の年代は、青年心理学的にみると、青年期の前期と中期の時期に相当する。もはやこどもとはいえない、しかしおとなでもないという、この年代は、一般に青年期と呼ばれる。この時期を想定しながら、ここでは、生徒を理解する視点と方法を検討する。

### 1 生徒理解の3つの視点

生徒を理解しようとするとき、さまざまな視点——例えば、生徒たちの青年らしさは一体どんな点なのか、かれと他の生徒との差異はどこにあるのか、——から把えることができる。ここでは、生徒を理解する3つの視点、青年性、世代性および個別性について述べる。

**青年性** 生徒たちの示す青年らしさとはどのような特徴を指すのか、ホールの時代——青年期という時期が社会的に公認されたのはホール、S (1904) の功績によるといわれている——から今日の中学生や高校生にいたるまで、青年のかわらない特徴、いわゆる青年らしさとは何か、を問う視点である。

社会構造が比較的分化していなかったホールの時代の青年から現代社会に生きる中学生や高校生などの青年にいたるまで、かれらのかかわらない様相とは何か。青年期という期間は、現代になるほど長くなる傾向を示すものの、いつの時代にもかわらない特徴は、それがこどもからおとなへの過渡期である、ということであろう。つまり、青年性を明らかにするためには、こどもからおとなへの過渡期的性格を分析し、そこからもたらされる青年の特徴を明らかにすればよい。

レヴィン、K (1951) は、場理論の立場からこの過渡期的性格を(1) 集団所属の変化 (2) 未知な位置への変化 (3) 身体領域における変化 (4) 行動の過激性、(5) 時間的展望 (6) 境界人の6つの側面から分析している。これら6つの側面をつぶさに検討すればわかるように、レヴィンは、青年期を1つの領域から他の領域へ移動しつつあるひとりの位置として把えたのであり、青年期とは、(1) 生活空間が地理的、社会的、時間展望的に拡大する、(2) 新しい状況が認知的に構造化されていない、(3) 自己の身体について新しい経験を——生活空間の中心的領域が不可解な変

化を生ずる時期である、と把握したのである。かれはこうした過渡期的性格から、青年(生徒)は、行動が不安定であり、両極端の行動を示しやすく、緊張・葛藤などの諸特徴を示しやすいことを指摘した。

**世代性** これは、今日の中学生や高校生の特徴は何か、戦前の生徒にくらべ、現代社会に生きる生徒の特徴は何か、を問う視点である。青年性、世代性の概念を青年心理学に導入した西平は、現代日本青年の世代的特質として (1) 信頼対不信——権威の否定と匿名の権威の肯定、(2) 自立対甘え——自己主張と自我の脆弱性、(3) 連帯対孤立——感覚の鋭敏さと感情の未熟さ、の3点を指摘する。

この視点からすれば、現代日本の家庭生活におけるこどもの養育環境の差異に注目することもできる。乳幼児期における母と子の結びつきの強さ、これに対する父親の働きが十分に機能していない家庭の養育状況から、今日の中学生や高校生は幼児化している、受動的である、などの特徴を指摘することも可能であろう。また、生徒が家庭や学校で示す特徴として、公的なものへの無関心と私的生活へのコミットメント、同調というよりは脱規範志向である、という指摘をすることも可能であろう。

**個別性** これは、クラスのある生徒の発達はこの生徒とくらべてどうであるか、この子の教科の成績は中学のときとくらべて進歩しているか、などといった生徒個人を全体的に把握しようとする視点である。この視点では、自分の受けもちの生徒ひとりひとりの特徴はどうなのか、わが子の成長、発達はどうか、を問っている。ひとりひとりの生徒は、明らかに他の生徒とは異なった個性をもっている。ひとりひとりの青年を、多数の側面について全体関連的にとらえることになる。生徒理解の視点として、個別性理解の視点にたつて、ひとりひとりの生徒を把えることは、それが困難な状況を伴いがちであるにしても、かかすことのできない視点といえる。そして、青年心理の研究視点として、とかくかけがちな視点であったことも事実であろう。

### 2 生徒理解の方法

生徒を理解する方法として、生徒を一般的に把握す

る仕方と生徒ひとりひとりを個別的に把握する仕方がある。これらの方法は、生徒理解における一般と個の把握の仕方であり、これらの方法を生徒理解の3つの視点——青年性、世代性および個別性の視点と関連させながら検討してみよう。

**一般的に把握する方法** これは生徒の一般的特徴を把握する方法である。生徒一般の把握は、法則定立的な目的をもち、生徒の通有性、規則性を明らかにする。

青年性と世代性の視点では、観察法、面接法、質問紙調査法などのさまざまな方法を使用して生徒の理解に迫るのであるが、基本的には、多数の生徒の資料を必要とする。したがって、青年性と世代性を明らかにするには、質問紙調査を使用して統計的手法に依存することになり、資料収集の方法も横断的な手法とならざるを得ない。得られたデータに示される生徒の青年性と世代性の特徴は、年齢効果、時代効果およびコーホート効果を分離することが難しい。

生徒理解における青年性と世代性という観点は、生徒の一般性の把握に通ずるものである。

**個人として把握する方法** これは個々の生徒の特徴を把握する方法である。ひとりひとりの生徒の把握は、個性記述的目的をもち、ひとりひとりの生徒の全体性、包括性、個別性を明らかにする。

生徒理解の個別性の視点では、面接、観察、日記などから得られる質的な資料が重視される。ひとりひとりの生徒の個別性を明らかにするには、事例研究を行ない、長期にわたる面接により、生徒の内面生活の力動性、多面性、独自性に迫ることになる。つまり、それぞれの生徒は、個性記述的な資料に基づいて理解される。

こうして、個別性という観点は、生徒の個の把握に通ずるものであり、教育の現場において多用されるべき視点といえる。

**調和的方法** 生徒の一般性を把握することは、研究の狙いが法則定立的であり、このために統計的・数量

的方法を採用する。しかし、この方法では、生徒の個別性の理解に難点がある。また、生徒の個別性を把握することは、個性記述的な目的をもち、この目的のために事例的、質的方法が採用される。しかし、この方法は、生徒の一般性の把握に難点がある。

これを調和する道は、この両方のもつ長所を最大限に生かすことであり、この両方法を交互に組み合わせることである。教育の現場で生徒指導などを念頭におくと、生徒の個別性の把握から出発し、通有性の検討を経て、さらに、生徒の個別性の理解に迫る三段階の分析手法が望まれる。こうした生徒理解のための方法は、三段階分析法と呼ぶことができ、生徒のパーソナリティや社会性の発達の理解に役立つものと思われる。

本校の紀要も30巻を数えることになった。本校教育の永年の努力と成果が、Ⅰ共同研究、Ⅱ教科研究およびⅢ特別研究、として結実している。

教育学部の附属学校として、教育の理論と実践についての研究を行なうことは、本校の使命の1つと考えられているのであるが、それにしても、教職員の研究成果が、このような形として公刊される運びとなったことは喜ばしいことである。

まず、授業研究、総合学習研究および生徒指導研究などは、共同研究として、それぞれの活動とここ数年来の取り組みを記述したものである。つぎに、教科研究として、国語、社会、数学、理科、保健体育、技術・家庭および英語の各教科の研究報告がなされている。さらに、特別研究として、生徒ひとりひとりが意欲的にとりくむ中学修学旅行のあり方が検討されている。

これらの研究は、いずれも、今日の中等教育における課題を迫及したものである。すでに述べてきた生徒理解の視点と方法に関連させていえば、個別性理解の視点と方法が、とくに事例研究的な実践報告は目立たないように思われる。

なお、本巻は紀要30集として、学部教育の諸論文も掲載されている。関係教育に謝意を表すものである。